

プログラム6「球溪の作歌活動について」

佐藤慶治（鹿児島女子短期大学准教授）・国府華子（愛知教育大学教授）

本日、演奏する《秋夜懷友》の楽譜を掲載します。この楽曲の原曲は、英国のW. T. Wrightonが作曲をした《Her bright smile haunts me still（彼女の明るい笑みを忘れられない）》であり、犬童球溪は大正3年に訳詞を行いました。球溪が作歌を行った楽曲の中では、《旅愁》《故郷の廃家》に次いで掲載回数が多い楽曲とのことです。原曲は「最後に会ってから何年も過ぎ、我々は再び会うことはない」で始まる3連の歌詞であり、寝ても覚めても、何処にいても、別れた女性の幻影が自分につきまとい、その明るい笑みを忘れることができない、という内容です。明治42年に近藤朔風が《ほととぎす》として訳詞を行って以降、複数の翻訳歌詞が作られました。

ここでいう「翻訳」ですが、これは一般的に言う翻訳とは違って必ずしも正確な内容の訳出ではなく、当時の日本の文化的背景に基づいて、内容の改変や後付けを伴っており、いわゆる「翻案」に近い作業でした。このようにして明治～大正に多く作られた楽曲は、「翻訳唱歌」という呼ばれ方をすることもあります。この「翻訳唱歌」は主にヨーロッパや米国の歌曲を原曲としており、《仰げば尊し》や《蛍の光》など、現在に伝わる多くの楽曲がこの時代に作られました。

さて、球溪の作歌の中にも「翻訳唱歌」に分類される作品が多々あり、歌詞内容を見てみると「郷愁」というテーマを後付けしたものが複数みられます。《旅愁》《故郷の廃家》もそうですが、別れた友を主題としている《秋夜懷友》も、「吾れのみひとり 淋しき窓に 変わらぬ月を 眺めぞ明かす」という歌詞より、主人公が郷愁の念に駆られていることがわかります。大正3年には、球溪は既に熊本に戻っていましたが、新潟赴任中のことを思いながら書いた歌詞なのではないでしょうか。

《秋夜懷友》

60

秋 夜 懷 友

Andante. W. T. Wrighton.

61

犬童信蔵『球溪歌集 四季』（音楽教育書出版協会、昭和11年）より